

# SEEDS

 知床財団  
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

No.232 秋号  
2016 /

自然特集

## 知床の虫さがし トンボ

活動レポート

## 企業寄付というご支援

知床・人・インタビュー第28回  
下鶴倫人さん

スタッフの本棚 第22回  
とりばん

知床財団購買部  
エコボトルの使い方

ココだけのはなし 第3回  
虫除けスプレーの呪縛





活動レポート

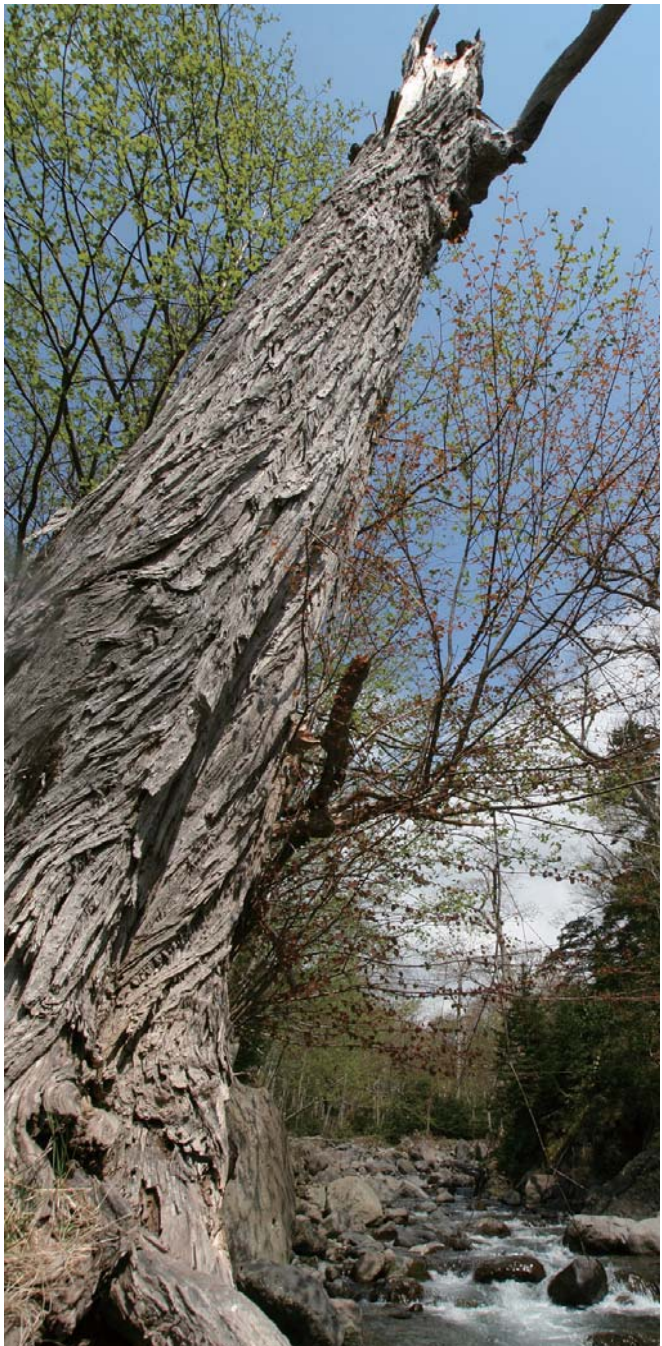
## 企業寄付と「つづぎ」支援

文・増田泰 事務局長

### 官

公庁からの発注事業以外の我々の活動は、賛助会員の皆さんからの会費や、寄付金を財源に行われています。官公庁の事業ではカバーできない課題について、独自の視点で必要な活動を進めていくためには、これらのご支援なくしては成り立ちません。その中には長年構想をもちながら実現していないプロジェクト全体を、社会貢献活動の一環として一企業にご支援いただくケースもあります。

今回はその一例として、2011年から5ケ年にわたったダイキン工業株式会社様による支援事業についてご紹介します。



### 2011年から

### 2015年の5ケ年事業

プロジェクトは大きく二つのテーマからなり、一つは川辺の自然環境を再生するための「カツラの森、命あふれる川の復元事業」、もう一つはヒグマとの共存を模索する「知床の人とヒグマの共存事業」です。以前から部分的な取り組みはあったものの、壮大かつ、まとまった資金が必要な内容で、実現に至っていませんでした。目的に共感し、資金提供していただいたダイキン工業のようなパートナーなしには実現し得なかったものです。

これらのプロジェクトには、資金を提供するダイキン工業と実際に事業を行う知床財団以外に、地元斜里町と羅臼町も参画し、四者で協定を締結して事業を実施しました。というのも、川辺の自然復元は、斜里町が進める開拓跡地でのしれとこ1000平方メートル運動(※)の一環であること、ヒグマ

との共存は知床世界自然遺産を抱える両町の施策の一つでもあることからです。

事業実施の過程では、地元の知床博物館や、東京農業大学(網走市)、北海道大学(札幌市)などの教育研究機関、各分野の専門家にも参画していただきました。そして何より、支援企業であるダイキン工業社員の皆さんがボランティアとして定期的に知床を訪れ、作業のお手伝いをしていただけました。事業開始当初は予期していませんでした。

普段は知床から遠く離れた土地で暮らし違う組織にいながらも、このプロジェクトを通じて新たな人のつながりができたことは何よりも大きな成果でした。

※かつて乱開発の危機にあった知床国立公園内の開拓跡地を保全し、原生の森を復元する斜里町の取り組みです。



カツラの稚樹を苗畑に移植するダイキン工業ボランティアの方々

### 事業① カツラの森、 命あふれる川の復元事業

しれとこ1000平方メートル運動の対象地である岩尾別川流域は、かつてはカツラの木を中心とする見事な河畔林がありました。しかし、1981年の大水害によって多くの河畔林が失われました。さらに、増加したエゾシカによって次世代を担う苗が食べられてしまうため、河畔林の再生がなかなか進みません。海と森が川でつなが

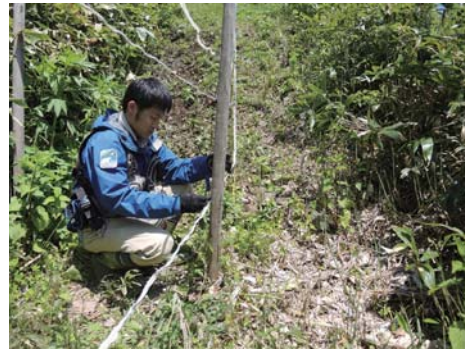
### 事業② 知床の人とヒグマの 共存事業

知床は人とヒグマが出会うことが非常に多い所で、2012年は約2100件もの目撃情報があり、ヒグマが市街地に侵入する事例も多くありました。ヒグマは人を見たらすぐに襲ってくる動物ではありませんが、人が対処法を誤ると重大な事故につながる可能性もあります。人もヒグマも安心安全に暮らしていくにはどうすればよい



のか、その答えを試行錯誤しながら見つけていくことは、知床に暮らす私たちに課せられた永遠のテーマです。

この事業では、羅臼町住民の生活地域へのヒグマの侵入を防止する電気柵を設置しました。また、ヒグマの外見的特徴や遺伝子分析による個体識別、GPS内蔵の首輪装着などを通して、ヒグマの1年を通じた行動や移動分散、血縁関係などを調べ、人とヒグマのトランプルを軽減させるための対策に役立つ基礎的な資料を蓄積するための調査(※)を並行して行いました。



市街地のそばに電気柵を設置するスタッフ

※知床財団、知床博物館、北海道大学獣医学部の共同事業

**プロジェクト①**  
多様性に富むしれこの森を復元する事業

■ 森の復元を進める上で障壁となっているエゾシカの対策。(老朽化した防鹿柵や樹皮保護ネットの補修等)

■ 開拓以前の森である針広混交林の復元

(広葉樹がエゾシカによる食害で壊滅し、針葉樹のみが生残した箇所への広葉樹の植込み等)



樹皮を1周はがされた木々はいずれ枯れてしまう

**ボランティアという有機的なつながり**

寄付事業の始まりと同時に現在も続いているのが、ダイキン工業の社員の方々によるボランティアです。春と秋の年2回、各回11名程度の参加者が知床を訪れ、現地作業をお手伝いいただいています。



河畔林での防鹿柵の設置作業



羅臼の市街地周辺に電気柵を張る

**プロジェクト②**  
世界遺産の価値を守り、伝える事業

■ 次世代を担う子供たちを対象とした環境教育活動。

■ 知床来訪者に森の役割、森林復元の取り組みを「伝える」活動。



しれとこ 100 平方メートル運動を子供たちに伝えるスタッフ

■ 地域住民とヒグマとの軋轢を回避し、両者がともに知床でうまく暮らしていくための活動。(電気柵の維持管理、草刈り等)



食事はスタッフとボランティアの皆さんで準備

**ダイキン工業・CSR 室 洲上様からのコメント**

2011年からの5年間で、のべ104名のダイキングループ従業員が知床ボランティアに参加しました。大自然の中で作業や地元の方々との触れ合いなどを通じ、参加者にとって知床が「会社が寄付している遠い土地」から「思い入れのある大切な場所」に変わってきています。

「環境保全にはひとりひとりの小さな行動の積み重ねが大切だと気付いた」「知床の森、つくりのように100年後、200年後の地球環境を考えた行動をしていきたい」などの感想が寄せられ、従業員の環境意識向上にもつながっています。

**続くご支援、進むプロジェクト**

ダイキン工業様からのご支援は当初2011と2015年の5年間の予定でしたが、先方のご厚意により、同社が世界各地で進める森林保全活動「空気をはぐくむ森プロジェクト」の一環として、さらに8年間、2024年までご支援いただけることとなりました。国内では唯一知床が選ばれたのも、これまでの「つながり」がなければ実現しなかったことです。

ご支援の継続により、私たちは新たに2つのテーマを設定し、それぞれの事業に取り組んでまいります。

**新** たな二つのテーマは5年間の成果を踏まえ、さらに前に一歩、歩みを進める内容です。森の復元については、河畔林のみならず、周辺地域においても復元の一助となる活動を進めます。世界遺産の価値を守り、伝える活動では、ダイキン社員ボランティアの皆さんとの間で生まれた絆をヒントに、知床サポーターの輪を道外居住者や次世代を担う子供たちにも広げる活動を行います。また、ヒグマとの共存については整備された電気柵を対策に活用するとともに、共存のための新たな取り組みも展開させる予定です。

り、そこから企業との人的、あるいは精神的つながりへと支援の輪が広がっていくことは、都心部から遠く離れた私たちにとってはとても力強い支援となります。

13年間の長きにわたるご支援により、長期的な視点で知床の保全活動に取り組めることは、我々にとって大変意義深くありがたいことです。皆様のご期待に応えられるよう、プロジェクトの成功に向けて、まい進していきたいと思

企業から寄付をいただくということは、事業の目的を達成するまで資金調達の心配なしにじっくりと取り組むことができ、また支援企業と事業の進行過程や達成感を共有できるというメリットがあります。資金面のつながりから始



今回の5ヶ年事業の詳しい報告書はコチラ

<http://www.shiretoko.or.jp/project/daikinshiguma.html>



ダイキン工業株式会社様のHPにも掲載されています

<http://www.daikin.co.jp/csr/shiretoko/index.html>

2016年に大阪で行われたダイキン工業ボランティアの同窓会

